

まえがき

本書の執筆にかかったのは平成三年の十月半ばのころで、それから二か月足らずで最初の下書きは終了していた。そのまますぐ活字にしていれば、とつくに出版の運びになっていたわけだけれども、その間に「神々の復活・参」の執筆に取りかかったことから、大幅に段取りが狂うことになった。本書は大国主神行が完了して根元界に到達するまでを、求道者群像とからめてまとめるはずだった。そして、最初の下書きではそのとおりに仕上がっていた。ところが別著の執筆で時間をとられている間に宇宙浄化の神行が始まってしまい、そこから思いもよらない世界が開けたことから、本書の内容に変更を加える必要が出てきてしまった。変更というよりは、「宇宙開闢」という題名をもってくる以上、それにふさわしい内容を盛るためには、二章ほど付け足さなければ格好がつかない現実が出てきてしまったのであった。

ところが、宇宙浄化の行はどんどん発展していった、筆者の日常生活のすべてを巻き込み、執筆する時間がまったく取れなくなり、出版は半年遅れ、一年遅れ、とうとう二年が過ぎてしまった。そのままであればさらに何年延びるかわからないところであつたけれども、周囲からの要請が日毎に強くなるし、自分自身

でもなんとかしてしまいたくもあって、ついに神行をさぼって残りを書き上げざるをえなくなった。前半を削って書き足していったわけであるが、予定よりもさらに一章分加えないとおさまりがつかなくなつて、とうとう十一章という落ち着かない数字になつてしまった。なんとか調整しておさまりのいい形にと考えてはみても、神ごとに追われて気持ちに余裕がなく、けっきょくそのままになつてしまった。

求道者群像を中心に、指導する者とされる者がどんなからみ方をして修行というものが進行していくか、といった領域にスポットを当てて、求道の参考にしたというのが当初の目的であつた。ところが神ごとが進行していくと、「宇宙開闢」の現実があれよあれよというまに拡大していつて、興味の方向が、求道者たちから宇宙の神秘のほうに移つてしまった。そのため前半と後半が内容の違うものになつてしまった。一気に書き上げてあつたものを、後になつていくるからそんなことになつてしまうわけだが、書く時間が取れなくなつてしまつては、それもやむをえない。

求道者群像から宇宙の驚異的な真実へと話が移行していく形は、さほど不自然なものではないはずで、これはこれで一編のドラマではある。余計な内幕を明かさなければ、本書だつて正当な評価を得ることができたかもしれない。しかし、

神界劇がからむようなドラマの場合は、真実のみが要求され、ささいな作りごとも許されないため、読み物としてはどうしてもフィクションほどの面白みは出せなくなる。とはいえ逆にこれを真実の書としてみる場合は、フィクションにはおよびのつかない神秘と不思議の世界が描かれていて、興味のつきない内容がふんだんに含まれているはずである。その意味では、他者の追従を許さない書物であるという自負を筆者は抱いている。

ただし気がかりなことがある。本書には、筆者にかかわった求道者たちの姿が現実そのままの姿で描かれている。もちろんそれは筆者の立場からみた姿でしかないわけで、書かれた側からみると不本意である点も多いのではないかと思われる。書き始めたころには、対象となる人たちにはその旨を告げて了解を得たつもりではいたけれども、それからかなりの時間が過ぎていくし、書いた内容を示して納得してもらったわけでもないのです、不満の出ることも予想される。しかし、筆者としては求道の指針となることのみを考慮して取り上げさせてもらったわけで、けっして登場人物の名誉や立場を傷つけようとしたわけではない。結果としてそうしたケースがあるとしたら、その責任はすべて筆者の側にある。願わくば本書の趣旨をご理解いただいてご寛恕かんじよいただきたい。

神界において筆者の悪態つきは有名で、かなりの顰蹙ひんしゅくを買っているのである

が、それでもこれぐらい神界のことを書いてもらえればということで、神界の現実を人間世界に紹介している努力に関しては、かなりの評価をもらっている。人間の場合はなかなかそうもいかない気がするが、きれいごとを形良く表すことからは、実質的な成果は望めないように思う。新しい時代の新しい宗教がどういものである、神を求め、真実を極めようとする者がどういいう苦勞をし、どんな具合に道を見出していくかは、現実そのままの姿を見るのが一番いい。その意味では求道者にとって参考となると思われる形で取り上げさせていただいた。もちろん登場人物はすべて仮名である。

さてそれはそれとして、本書では一般の人たちにはまったく受け入れてもらえない領域にまで踏み込んでいる。今までの神界劇のドラマに関して奇想天外な内容で、容易に一般受けはしないものであったが、本書に至ってはさらに人間感覚からはかけ離れた神秘的の世界に突っ込んでしまっている。後半部分などは発表しないと心に決めていた内容であって、書くことにかんがりのためらいがあった。そういう意味では求道者群像一色で仕上げたほうが、人間向きではあったのである。しかし、時代は変わりつつある。新しい時代の新しい宗教を打ち出すために、その道しるべとなるような書物を書くとなれば、ただ俗受けするだけの文章を書いて仕方がない。たとえば神々からたたかれようが、人間に憎まれようと、

新しい時代に合わせた宇宙の真実が現われるほうが好ましい。

今の世に本書は受け入れられなくとも、先の世では本書の内容が当たり前となる時代が必ずやって来る。その先導役を勤めることができるのであれば、筆者にとってこれにまさる喜びはない。二十一世紀はいよいよ近づいてきているが、「根元への道」シリーズは、時が過ぎるにつれていよいよその真実性を現わにしつつある。誰にも受け入れられないのではないかと思われていた神界劇も、徐々にではあるが真実を求める人たちの目にとまるようになって、今では神々が驚くほどのミコトモチ集団ができてつつある。これから先まだまだミコトモチは増えていくであろうし、新しい時代ではミコトモチであることが、神界コースの求道者の当たり前の姿ということになっていくのではないかとも思われる。

平成五年十二月十五日記す